

7. 病虫科(寄寄)

(1)青柳實雄(1932):柑桔瘡皮病とその葉病散布時期に関する研究。徳島県農事試験場

(2)青柳實雄(1933):橘瘡を寄主とする白癭病に就て。
日園雑、45(2):44p.

(3)青柳實雄(1934):海鞘白癭病に就て。
大日本農会報、(589):109p.

(4)青柳實雄・榎田憲(1935):石灰ボルドー液の胡瓜生育並に収量に及ぼす影響。
病虫雑、22(1):47～50。

(5)青柳實雄(1936):栗刺枯病に関する研究。
徳島農事試験特別報告、(1)

(6)佐々木成則・石井博(1952):稲白葉枯病抵抗性品種導入に関する研究(予報)。(講要)。
日植病報、17(1):42。

(7)石井博(1952):麦類赤黴病の分生胞子飛散と第2次伝染。
中国四国農研、(1):45～47。

(8)石井博・小山弘(1952):麦類赤黴病の分生胞子飛散と第2次伝染。
農友、27(3):397～398。

(9)佐々木成則(1953):稲白葉枯病抵抗性品種導入に関する研究(講要)
日植病報、17(3～4):154。

(10)佐々木成則・石井博・柏木弥太郎(1953):セレン石灰の稲熱病防除効果に関する研究。
セレン石灰の稲熱病防除効果比較試験。
中国四国農研、(3):19～20。

(11)佐々木成則・石井博・柏木弥太郎(1953):セレン石灰の稲熱病防除効果に関する研究。
セレン石灰の葉害に関する試験。
中国四国農研、(3):25～26。

(12)佐々木成則・石井博・柏木弥太郎(1953):セレン石灰の稲熱病院除効果に関する研究。
セレン石灰による白葉枯病防除試験。
中国四国農研、(3):33。

(13)石井博・柏木弥太郎(1953):本邦における麦類赤黴病の流行機構に関する研究(第1報)
(講要)。
日植病報、17(3～4):160。

(14)石井博・柏木弥太郎(1953):麦類赤黴病の第1次伝染と稲株並びに防除に関する一知見
(講要)。
日植病報、18(1～2):89。

(15)石井博・柏木弥太郎・佐々木成則(1953)本邦における麦類赤黴病の流行機構に関する研究
(第1報)。
徳島農試研報、(1):10～16。

(16)佐々木成則・柏木弥太郎・石井博(1953):ダイコンバイラス病防除に関する研究(第1報)。
徳島農試研報、(1):36～39。

(17)石井博(1954):麦赤黴病の流行と気象。
植防、8(4):3～8。

(18)石井博・柏木弥太郎(1954):ダイコンバイラス病と前作との関係、土壌PHの推移と
ダイコンバイラス罹病度との関係。(講要)。
日植病報、19(1～2):72。

(19)石井博・柏木弥太郎(1955):麦類赤黴病の防除に関する二、三の知見(講要)。
日植病報、19(3～4):162～163。

(20)石井博(1955):本邦における麦類赤かび病の流行機構に関する研究(第3報)発生型と
その予察(講要)。
日植病報、20(2～3):108。

(21)石井博・谷幸泰(1956):稲紋枯病の発生推移に関する二、三の知見(講要)。
日植病報、20(4):191～192。

(22)石井博・谷幸泰(1956):稲紋枯病に関する研究(1)、稲紋枯病に対する Creosot oil の効果
(講要)。
日植病報、21(2～3):103～104。

(23)石井博(1957):水稲早期栽培における稲紋枯病の収量構成に及ぼす影響(講要)。
日植病報、22(1):7。

(24)石井博・岡田一(1957):稲紋枯病に対する Creosot oil の効果(第2報)講要)。
日植病報、22(1):53～54。

(25)石井博(1957):水稲早期栽培における稲紋枯病の収量構成に及ぼす影響。
徳島農試研報、(2):16～19。

(26)石井博・稲木守(1957):ツーツットの稲紋枯病防除効果に関する研究。生石灰加用
ツーツットの稲紋枯病防除効果比較試験。
四国農研、(2):18～19。

(27)佐々木成則・片島由雄・柏木弥太郎(1957):ツーツットの稲紋枯病防除効果に関する
研究。ツーツットの濃度および散布回数と稲紋枯病防除効果に関する試験。
四国農研、(2):8～9。

(28)石井博・柏木弥太郎(1958):水稲品種の稲紋枯病に対する耐病性の機作(予報)(講要)。
日植病報、22(1):5。

(29)佐々木成則・石井博・柏木弥太郎(1958):小鈴病に対する石灰硫黄合剤の防除効果に
関する試験。
四国農研、(4):7～8。

(30)石井博・柏木弥太郎(1959):水稲早期栽培に伴う病害の流行機構に関する研究
第1報。稲紋枯病。
徳島農試研報、(4):11～20。

(31)石井博・川尻啓介(1959):麦類赤黴病の分生胞子形成と栄養条件(講要)。
日植病報、24(1):51。

(32)石井博・川尻啓介(1959):麦類赤黴病の分生胞子形成と栄養条件(II)(講要)。
日植病報、24(1):11。

(33)石井博(1959):麦類赤黴病の流行とその防除法。
農友、35(5):821～824。

(34)佐々木成則・石井博(1960):有機水銀剤の散布時期と稲クビ、シヨウイモチ病の
防除について。
四国農研、(7):56～64。

(35)柏木弥太郎(1960):水稲穂枯症に関する研究、第1報。秋落水田における晩期追肥と
有機水銀剤散布が穂枯症および収量に及ぼす影響。
徳島農試研報、(5):16～19。

(36)石井博・川尻啓介(1960):ムギ類赤黴病の流行機構に関する研究(第10報)。潮風の
本邦に及ぼす影響(講要)。
日植病報、25(5):225。

(37)石井博・谷幸泰・稲木守(1960):レンコン腐敗病の防除に関する研究。石灰素と
マンガン肥料の併用効果(講要)。
日植病報、25(1):24。

(38)石井博・片島由雄(1960):レンコン腐敗病と土壌pHとの関係(講要)。
日植病報、25(1):56。

(39)石井博・川尻啓介(1961):ムギ類赤黴病の流行機構に関する研究(第11報)。潮風の
本邦に及ぼす影響(2)(講要)。
日植病報、26(2):53。

(40)石井博(1961):ムギ類赤黴病と流行機構に関する研究。
病虫発見特別報告(8)、徳島農試特別報告、(3)。

(41)石井博・川尻啓介(1962):ムギ類赤黴病に対する界面活性剤加用散布薬剤の防除効果(講要)
日植病報、27(5):260。

(42)石井博・川尻啓介(1962):キュウリの蔓枯病併発細菌性病害と薬剤防除に関する知見(講要)
日植病報、27(2):69。

(43)柏木弥太郎・佐々木成則・平井篤造(1964):稲葉緑病の細胞内封入体について 第1報。
2、3の感染植物の封入体と封入体による診断(講要)。
日植病報、29(2):73。

(44)柏木弥太郎・佐々木成則・平井篤造(1964):イネくろすじ萎縮病稲病稲の細胞の変異と
封入体の染色性(講要)。
日植病報、29(2):70。

(45)T.Hirai,N.Suzuki,I.Kimura,M.Nakazawa,and Y.Kashiwagi(1964):Large Inclusion Bodies
Associated with Virus Diseases of Rice.Phytopathology.54(3):367～368。
日植病報、29(2):63。

(47)山本勉・片島由雄・川尻啓介(1965):畦畔散布機によるイネ、ムギ主要病害の防除効果に
及ぼす展着剤加用量の影響(講要)。
日植病報、30(3):106。

(48)松井千秋・柏木弥太郎・日比野啓行・林隆治・藤沢一郎(1965):イネ緑葉枯病の結晶封入体
の観察(報告)(講要)。
日植病報、30(5):298。

(49)柏木弥太郎(1966):イネくろすじ萎縮病イネの細胞の異常と封入体の染色性(講要)。
日植病報、32(3):168～170。

(50)柏木弥太郎・佐々木成則(1966):イネ緑葉枯病稲病稲の細胞封入体について(1)。
徳島農試研報、(8):21～24。

(51)柏木弥太郎(1966):イネくろすじ萎縮病稲病イネの細胞の異常と封入体の染色性。
徳島農試研報、(8):25～26。

(52)山本勉(1966):施設野菜病害と防ぎ方ハウストンネル栽培のナス、ピーマン。
植防、20(10):19～21。

(53)山本勉・川尻啓介(1966):コンニャク葉枯病の伝播様式と暴風雨に関連した薬剤防除の
時期について(講要)。
日植病報、32(2):98。

(54)山本勉・片島由雄・川尻啓介(1967):畦畔散布機による病害防除効果と展着剤加用量
との関係について。
徳島農試研報、(9):35～40。

(55)山本勉・川尻啓介(1967):コンニャク葉枯病の防除について。
四国植防研、(2):61～72。

(56)山本勉・川尻啓介(1967):徳島県下におけるコンニャク病害の発生と被害について。
徳島農試研報、(9):27～34。

(57)山本勉・川尻啓介・酒井勇夫・福西裕(1968):イネ紋枯病防除に対する広巾散布用動力
噴霧機の使用法について(講要)。
日植病報、34(3):191。

(58)山本勉・川尻啓介・酒井勇夫・福西裕(1968):イネ紋枯病防除に対する広巾散布動力
噴霧機の使用法について。
徳島農試研報、(10):21～28。

(59)山本勉・福西裕(1968):ナス黒枯病の発生に及ぼす環境条件について(講要)。
日植病報、34(5):301～302。

(60)山本勉・川尻啓介(1968):カスガミシンのトマト葉かび病防除効果について(講要)。
日植病報、34(5):392。

(61)山本勉(1968):キュウリ緑斑モザイク病の発生と被害に及ぼす影響。
四国植防研、(3):47～57。

(62)山本勉(1969):ナス斑点細菌病の発生に及ぼす環境条件と防除薬剤(講要)。
日植病報、35(5):383～384。

(63)山本勉・福西裕(1969):Rhizoctonia菌によるネギ苗立枯病の薬剤防除。
四国植防研、(4):55～58。

(64)山本勉・川尻啓介(1969):カスガミシンのトマト葉かび病防除効果とその解析。
徳島農試研報、(11):25～32。

(65)山本勉・福西裕(1970):イチゴ炭そ病について(講要)。
日植病報、36(3):165～166。

(66)山本勉・川尻啓介(1970):シロウリの実腐れとその防除。
四国植防研、(5):71～78。

(67)山本勉(1970):徳島県におけるハウス栽培のキュウリおよびナスの病害と防除。
植防、24(7):4～7。

(68)山本勉(1971):徳島県におけるキュウリ緑斑モザイクウイルス病の防除。
植防20周年記念誌、323～325。

(69)山本勉(1971):イチゴの新病害「炭そ病」。
植防、25(2):21～24。

(70)福西裕・須藤真平・山本勉(1971):ウリ類疫病による被害の実態。
四国植防研、(6):95～100。

(71)山本勉・福西裕(1972):パリダシによるイネ紋枯病の防除とくに散布時期、回数、間隔
について。
四国植防研、(7):13～20。

(72)山本勉、上原等(1972):ネギ、タマネギの苗立枯病とその防除。
植防、26(4):19～22。

(73)柏木弥太郎・田村礼二(1973):ハス褐斑病(新病)について(1)発生と病原菌(講要)。
日植病報、39(3):202。

(74)山本勉・川尻啓介(1973):水和剤(粉体)の少量散布によるハス病害の防除。
四国植防研、(8):29～36。

(75)福西裕・山本勉・須藤真平(1973):キクさび病に対する薬剤防除について。
四国植防研、(8):37～42。

(76)福西裕・加々美好信(1974):非水銀剤による種もみ消毒効果。
四国植防研、(9):105～108。

(77)柏木弥太郎(1974):ハス褐斑病について(2)薬剤防除(講要)。
日植病報、40(3):219。

(78)山本勉(1974):ナス斑点細菌病の生態と防除。
植防、28(10):31～34。

(79)生越明・福西裕・酒井隆太郎(1974):エンドウのすそ枯れ症状に関する研究。
ニードウからの Aphanomyces euteiches の分離とエンドウに対する病原性(講要)。
日植病報、40(3):194。

(80)福西裕(1974):コルデリナーネの疫病(新病害)(講要)。
日植病報、40(2):138。

(81)柏木弥太郎(1975):ハス褐斑病について(3)発生と生態(講要)。
41(3):266。

(82)福西裕・須藤真平・山下定利・岡田小太郎・生越明・酒井隆太郎(1975):エンドウすそ枯
症状に関する研究(2)徳島県における発生生態と土壌検査(講要)。
日植病報、41(3):273。

(83)山本勉・川尻啓介(1975):イチゴ果実の病害防除効果に及ぼす液剤の散布量と展着剤加用
量の影響。
四国植防研、(10):35～40。

(84)山本勉・福西裕・川尻啓介(1975):ハウス栽培のナス黒枯病に関する研究(第1報)ナス
黒枯病の発生発生状況および発生環境。
徳島農試研報、(14):49～58。

(85)福西裕・山本勉(1975):ハウス栽培のナス黒枯病に関する研究(第2報)ナス黒枯病の生理
生態および伝染経路。
徳島農試研報、(14):59～74。

(86)福西裕・山本勉(1975):ハウス栽培のナス黒枯病に関する研究(第3報)ナス黒枯病の薬剤
防除とその効果の解析。
徳島農試研報、(14):75～82。

(87)山本勉(1975):キュウリ緑斑モザイク病に関する研究とくに発生環境、伝染方法ならびに
防除法について。
徳島農試特別報告、(5)

(88)福西裕・山本勉(1975):コルデリナーネの疫病の発生。
四国植防研、(10):41～48。

(89)福西裕・生越明・黒島忠司・奥馬克夫・山本英紀(1976):徳島県下で発生したサツマイモ
かいう病の病原、黒島、ほ場環境および薬剤防除(講要)。
日植病報、42(3):339。

(90)福西裕・生越明・酒井隆太郎(1976):徳島県下におけるエンドウ“すそ枯れ症状”をひき
おこす Aphanomyces euteiches DRECHSLER。
日植病報、42(1):53～55。

(91)福西裕(1977):Stemphylium 属菌によるニンニクの葉枯病(新病)(講要)。
日植病報、43(1):86。

(92)柏木弥太郎・山本勉(1977):冬ダイコンに発生する横痂症について(予報)(講要)。
日植病報、43(3):343。

(93)富永時任・西山幸司・山本勉(1977):Pseudo-monas cichorii によるナスの褐斑細菌病。
日植病報、43(5):569～574。

(94)柏木弥太郎(1977):ハス褐斑病の発生生態と防除。
徳島農試研報、(15):21～32。

(95)福西裕(1977):土壌くん蒸剤のマルチ畦内畦面による土壌病害防除(1)クロピクリン
くん蒸剤による土壌消毒の効果と被害に関する基礎的調査。
徳島農試研報、(15):33～42。

(96)山本勉・金歳泰雄(1977):殺菌剤の少量散布(フロースト)によるハス病害害虫の防除。
徳島農試研報、(15):43～54。

(97)山本勉・金歳泰雄・須藤真平・山下定利・岡田小太郎(1978):徳島県における昭和15年
度稲苗のこま葉枯病多発生原因と薬剤防除。
四国植防研、(12):7～14。

(98)金歳泰雄・柏木弥太郎(1978):オオムギ斑葉病に対する種子消毒の効果。
四国植防研、(13):43～48。

(99)福西裕(1978):ホレング根腐れ症状株とその土壌から分離される病原菌(講要)。
日植病報、44(1):86。

(100)山本幸司・山本勉・梅川学・江塚昭典(1978):Pseudomonas viridiflava によるトマト
黒斑細菌病(新病)(講要)。
日植病報、44(3):378～379。

(101)福西裕(1978):ナス黒枯病防除薬剤の効力低下(予報)(講要)。
日植病報、44(3):404。

(102)山本勉・金歳泰雄(1978):水管理とくに夏季の落水がハス腐敗病の発生におよぼす影響。
四国植防研、(12):39～42。

(103)山本勉・金歳泰雄(1978):スイカユウガイオの根腐病。
徳島農試研報、(16):66～68。

(104)金歳泰雄(1979):オオムギあかぎ二条の種子消毒法。
四国植防研、(4):19～24。

(105)西山幸司・山本勉・梅川学・江塚昭典(1979):Pseudomonas viridiflava によるトマト
黒斑細菌病。
日植病報、45(2):221～227。

(106)西山幸司・福西裕・寺田孝重・江塚昭典(1979):Xanthomonas carotae によるニンジン
斑点細菌病の本邦における初発生。
日植病報、45(5):683～688。

(107)山本勉(1979):べと病菌によるハナヤサイの“入黒”症状。
四国植防研、(14):43～44。

(108)山本勉・川尻啓介・金歳泰雄(1979):薬剤散布の時期・間隔・病斑縮小などが病害防除
効果に及ぼす影響。
徳島農試研報、(17):25～37。

(109)松尾卓史・宮下秀子・福西裕(1979):徳島県下に多発したサツマイモかいう病の病原
Fusarium 菌(講要)。
日植病報、45(1):80。

(110)山本勉・金歳泰雄(1981):ハウス内稲わら施用によるイチゴ灰色かび病の防除。
農友、56(1):42～44。

(111)金歳泰雄・酒井勇夫(1981):おが屑堆肥の施用と土壌病害(第1報)おが屑堆肥に混入
する主要土壌病原菌の動き。
四国植防研、(16):37～42。

(112)金歳泰雄・山本勉(1981):稲わら施用がハウス内の環境ならびに病害の発生に及ぼす
影響。
徳島農試研報、(19):21～30。

(113)金歳泰雄・黒島忠司(1982):おが屑堆肥の施用と土壌病害(第2報)おが屑堆肥の運用が
ダイコン根部黒変症の発生に及ぼす影響。
四国植防研、(17):51～63。

(114)金歳泰雄(1982):ダイコン根部黒変症(横し)に関する研究。
総合助成報告書:75～98。

(115)金歳泰雄・山本勉(1982):ハウス内稲わら施用におけるわらの吸湿条件ならびに作物の
生育、収量と、3病害の発生に及ぼす影響。
徳島農試研報、(20):6～14。

(116)金歳泰雄・柏木弥太郎(1983):ダイコン幼苗期の根腐黒変と立枯について(第1報)発生
原因と薬剤防除。
四国植防研、(18):29～38。

(117)山本勉・金歳泰雄(1983):イチゴうどんこ病の発生生態と防除に関する研究。
徳島農試特別報告、(6):1～69。

(118)金歳泰雄(1983):ムギうどんこ病の冬季多発生と薬剤防除の効果。
徳島農試研報、(21):27～33。

害 虫

(1)徳島県農事試験場(1922):藍作害虫に関する調査。徳島県農事試験場

(2)徳島県農事試験場(1926):梨の癭虫蝨虫駆除予防試験成績予報。徳島県農事試験場

(3)青柳實雄(1938):栗実虫モモゴダノメイガ防除成績。
徳島農試特別報告、(5)。

(4)坪井武夫(1950):徳島に於けるサンカイチュウの発生予察に関する研究(Ⅰ)、第1化期の
発生と冬季の気象との相関及び予察法について。
応昆、6(4):163～171。

(5)坪井武夫・柏木弥太郎・野口義弘(1952):ルビーローシンの寄生蜂ルビーアカヤドリコバチ
(Anicetus ceroplastes Is.)導入に関する2、3の知見。
中国四国農研、(1):66～68。

(6)以西信夫(1953):稲葉の損失が生育収量に及ぼす影響。
徳島農試研報、(1):17～22。

(7)坪井武夫・以西信夫・野口義弘(1953):BHCによるエンドウゾウムシ防除に関する
二、三の知見(予報)。
中国四国農研、(4):41～42。

(8)坪井武夫(1954):サンカイチュウの発生予察に関する研究(Ⅱ)、発蛾時期及び発蛾量
相互の関係について。
中国四国農研、(5～6):125～126。

(9)坪井武夫・野口義弘(1954):ニカメイチュウ第1化期後発蛾量数の予察。
中国四国農研、(5～6):125～126。

(10)小林尚(1954):苗代における薬剤散布が昆虫相の変動に及ぼす影響について。
応動昆講演要旨:12。

(11)坪井武夫(1955):徳島におけるサンカイチュウの発生型について。
応昆、11(4):150～155。

(12)坪井武夫・野口義弘(1955):サンカイチュウによる稲の被害調査法に関する研究。
徳島農試特別報告、(1)。

(13)小林尚(1955):殺虫剤散布による水田昆虫相の変動。
応動昆講演要旨:17～18。

(14)小林尚(1956):殺虫剤散布による昆虫相の変動について(3)。
応動昆講演要旨:22～23。

(15)小林尚・野口義弘(1956):イネクロカメシ防除法の研究(第1報)イネクロカメシの
バチオンに対する抵抗性について。
応昆、12(2):82～85。

(16)小林尚(1956):稲作害虫に対する殺虫剤散布必要度合の予想方法確立に関する研究(1)。
予察灯のニカイガ誘殺数による被害基準の予想法について。
四国農研、(1):69～71。

(17)坪井武夫(1956):土壌中のBHCが作物の生育および収量に及ぼす影響。
応動昆シンポジウム講演要旨:38～41。

(18)坪井武夫・小林尚・以西信夫・野口義弘(1956):土壌中のBHCが作物の生育、収量に
及ぼす影響。
応昆、12(4):177～189。

(19)小林尚・野口義弘(1957):水稲の早晩期栽培とニカメイガの産卵選択性との関係。
徳島農試研報、(2):19～21。

(20)小林尚(1957):殺虫剤散布による水田昆虫相の変動(4)殺虫剤散布後のツマグロコバ
イ増加の原因について。
応動昆講演要旨:20。

(21)小林尚・野口義弘(1957):ティバテレックスのニカメイチュウ防除効果。
徳島農試研報、(3):10～11。

(22)以西信夫・山下定利(1957):ニカメイチュウ第2化期発蛾最盛日の予察について。
徳島農試研報、(3):12～14。

(23)小林尚・野口義弘(1957):イネクロカメシ防除法の研究(Ⅱ)、イネクロカメシのBHC
に対する抵抗性について。
応動昆、11(1):36～40。

(24)小林尚(1957):新塗剤による柑橘のゴマダカシガリ産卵防止。
応動昆、11(4):224～253。

(25)小林尚(1957):農業の新しい使用 Setting に関する研究(第1報)。
農友、32(1):63～64。

(26)小林尚(1958):殺虫剤散布による昆虫相の変動(